

## 空き缶とジャージャー麺

川口基督教会牧師 司祭 ステパノ 柳 時京

1995年5月に司祭按手を受けてから、冬頃に、翌年の人事異動の発表がありました。教区主教との面談では「君は神学院を出てから神学大学や管区事務所ですっと忙しく働いてきた。これから田舎の教会へ行くことになる。今までと違ってゆったりできるはずだ。本も読んで、余裕をもって、牧会の経験を積んで頂きたい」と言われました。翌年の2月10日、真冬の土曜日に赴任先の松山（ソンサン）教会に向かいました。この教会は、江華島という島の北部にある農村教会で、韓国聖公会の中で北朝鮮との軍事境界線に最も近い最北端でした。町に入るためには、まず村の入口の海兵隊検問所で身分証明書を見せなければならず、車の場合には乗車人数をチェックされるなど、出入りが厳しく制限される場所でした。当時までは教会の設立以来ずっと定住牧師はおらず、私が初の定住牧師として赴任しました。

翌日の赴任礼拝を控えて信徒代表と共に準備に取り掛かったところ、教会の庭に人の気配がして出てみたら、町の中高生が数人覗きに来ていました。都会から新しい司祭が来るので、気にかけていたのでしょう。実は、その初対面の時から、彼らと私とのひそかな激しい綱引きが始まりました。何とかして教会に来てもらいたい牧師の下心と、つまらない聖書の勉強より何か楽しいことを期待する子どもらの好奇心との闘いでした。よそよそしい彼らとの距離を縮めるには1か月以上かかりました。やっと毎土曜日午後に教会で集まるようになり、一応「学生部」という名称も付けました。

私は当初から、教会の中での小難しいおやじ牧師のお話だけではどうしようもないと思っていて、彼らに「我々で何か町のために出来ることは？」とぶつけました。いろいろ話し合った結果、町の貯水池のほつりを掃除したらどうかという案にまとまりました。そこには釣り客が沢山来ていて、かなりゴミが捨て置かれていたのでした。掃除を兼ねて、その中から空き瓶や缶などを収集して売り出したら、ちょっとしたお金も出来るのではないか、ということでした。それで、毎土曜日ごとに学生部の湖畔(?)集会が始まりました。1か月ごとにそれを集めて、瓶類を車に乗せてみんなで島の大きい町に売りに行きましたが、酒の弱い私にとっては車の中に漂う匂いだけでも酔うほどで、飲酒運転ではなく「臭酒運転」でした。

帰り道にご褒美として、中華屋でジャージャー麺(韓国オリジナルの黒いソースの麺)を食べることが定番になっていました。空き瓶の値段が一番高く、瓶の数が多い時には麺に酢豚も注文したりして、学生部は日に日に盛り上がっていきました。最初3人でスタートした学生部は、私が離任する際には12人ほどに増えていて、これは実は町の中高生全員の数でした。そこまでになったのは、おそらく、ジャージャー麺の力だったでしょう。町を綺麗に

したいという素朴な気持ちで始まったゴミ収集ですが、今時の言葉で言うと、いわゆる環境問題に取り組んだこととなります。当時子どもらもう成人しているので、もし何処かに釣りや遊びに行ったら、空き瓶などゴミを捨てないことくらいは、きっと心に残っていると思います。「神はこれを見て、良しとされた」(創世記 1:10) という聖書の言葉までは覚えなくとも。

(川口基督教会 牧師)